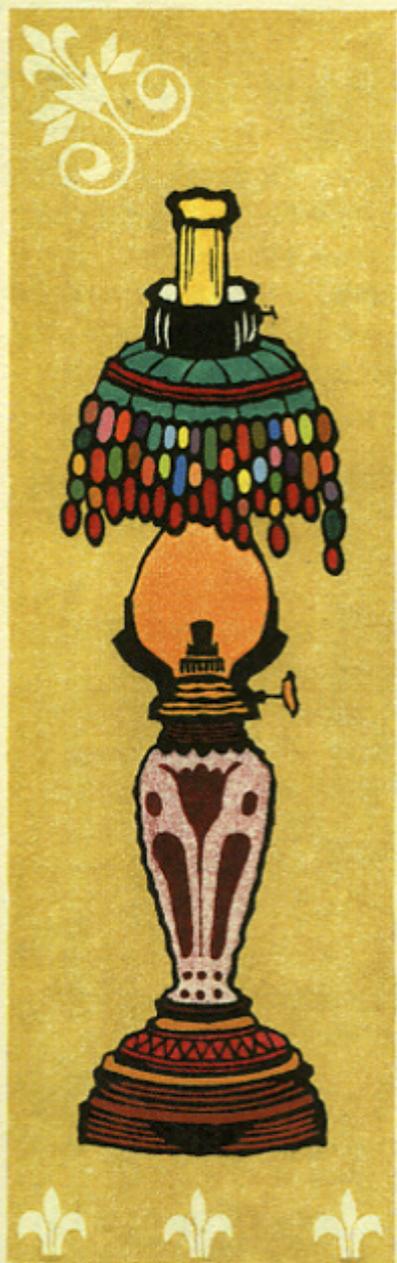


春燈

10月号
October 2012



主宰の句

安立公彦

城山へ道ふかぶかと夏木立

帰省子に父ははの墓優しかり

明易きラジオが語る敦の句

高灯る隣家の窓や熱帯夜

降りしきる蟬声戦後永かりし



成瀬櫻桃子の句

旅の蛍病む娘の苞に捉へむか

『春燈』平成四年

平成四年六月、関西大会（京都府綾部）での作。折しも、綾部は蛍の季節であり綾部の有志が櫻桃子先生を蛍狩にご案内した。えも言われぬ蛍の闇に、先生は愛娘美菜子さん（ダウン氏症）を思い出されたのであろう。掲句下五の「……か」の詠嘆の助詞が、先生の父性愛の情感を一層深めている。天国の蛍どきには、父娘で蛍狩をしておられることであろう……。

和田孝村

成瀬櫻桃子の句

野火遠しなべてひとりの旅ばかり

『風色』昭和四十八年

初心者教室で、亡き石鍋静穂先生が、旅吟の一例として紹介して下さった。野焼きなど見た事もなかったのに、遠近法の絵の様な情景が、鮮明に浮かんだ。春浅い窓外を遠野火がゆっくり流れて行く。へなべてひとりの旅ばかり。ばかりに心情の思い入れがある。来し方を思われたのだろうか。サラリーマンの悲哀を感じる。旅吟と
言うには重い一句である。

長谷川歌子

燈下集



○ 橋本リエ

ラベンダーの香を同伴の見舞客
大西日たつた十歩に泣きしかな
鉄線の白点々と暮れにけり
割れさうで割れぬ大きな西瓜かな
秋風にやさしくされてゐたりけり

○ 青柳雅子

横着な四万六千日詣
鳥獣の戯れて風生む扇かな
紫陽花のみやびの雨となりけり
燃ゆる日の海に溶けこむ静寂かな
星飛んでしどろもどろの願ひ事

○ 木多芙美子

母の忌の近づく草を刈りにけり
青春の汗匂ひくる柔道着
友のこ糸残る空地や草いきれ
青鬼灯公園暮れてきたりけり
人悼み星のつぶやく八月来

四万六千日スカイツリーは雲がくれ
老杉の風のまにまに頭の涼し
禅院の素足うれしや長廊下
氷柱に手を置き河童忌と思ふ
打水や結界におく石ひとつ

○ 西山浅彦

夢見つつ詩を書く少女蟻地獄

夕焼雲窓ひとつなき懺悔室

逝く夏や律儀なピアノ調律師

読みかへす筈の一書や夜の秋

いわし雲ピエロ真顔を見せにけり

○ 小張志げ

童謡記念日子鴉の良く鳴く日

ミニトマトほどの炎や恋初め

待ちこがれ逢瀬みじかし月下美人

このハンカチ悔いの涙は拭ふまじ

四万六千日へ常に変はらぬ日和下駄

○ 江草礼

自動ピアノの黒鍵びこと夜の秋

中天に音のたゆたふ揚花火

籠枕二三句生みて風通す

孫の来て西瓜のお面はにかめり

畦の草刈るやあらはにルーム履

○ 見田英子

保育園緋衣草の咲きそろふ

登り坂となるランナーや油照

人住まぬ家を覆ひぬ凌香花

ふるさとに子も父母も無し盆の月

女子高生の風炉茶賜る蔵座敷

○ 白杵游児

木挽町傘躲し合ふ男梅雨

スイツチバック残る箱根の山法師

ひぐらしの遠音に暮るる宗祇水

落人の商も陽気に阿波をどり

廃校にむかしをとばす鳳仙花

○ 岩永はるみ

裸ん坊つぎつぎとんで川光る

遠き日をゆつくり回す扇風機

暑に抗す夫の形状記憶シャツ

賑やかに別れて淋し蛭狩

肩触れてより無口なり濃紫陽花

当月集

安立 公彦選



○ 薰風や隨身門の翁神

嵯峨竹林溽暑の風の揺れ重し

竹落葉狐の嫁入り通りけり

明易の腓返りに覚むる夢

老鶯や北山杉の風の道

○ 齋藤晴夫

○ 藤原若菜

鐘涼し階のぼるわらぢ虫

夏至過ぎの海光をただ眩しめり

浜木綿や指の間に残る砂

枇杷剥くや旅を了へたるひとりの夜

家持たずしがらみ持たずなめくぢり

○ 原田小芝

生くるとは我慢の続き夜の秋

夏の雲夢を忘るる枕かな

明日食ぶる餡ばん買ひに夏の月

梅雨滂沱顔の染み浮く夕べかな

大夕焼暮れなんととして未練あり

○ 篠原幸子

能管の一閃梅雨を払ひけり

大緑陰古老もとより話好き

ねむの花「盧生の夢」をつつみける

匂ひ立つおいらん草の白さかな

雑念のまつはる髪を洗ひけり

○ 中嶋昌子

しこ草のうれのそよぎも秋立ちぬ

家内の亡夫の手跡や洗硯す

八月や忘れてならぬことばかり

孟蘭盆会卒塔婆はみな海へ向く

何もかも包む歳月盆の月

春燈の句

安立 公彦選

川風を袂に四万六千日

神奈川 石田 康明

さても世の胡瓜に負けぬ曲がりやう

外湯まで青葉しぐれを急ぎけり

パイの皮ほろと零るる夜の秋

勤行の卒寿の单座夏椿

掻き均す矮鶏の蹴爪や半夏生

髪膚佳し湯の香さらりと夕端居

七回忌修し独りの髪洗ふ

梅雨夕焼糸尻欠けし父の碗

燕の子胸の綿毛を膨らます

土用三日百姓殺す空模様

軍場に覚えし草笛忘れたり

新涼や野猿峠の美術館

裏返る桐の葉しるき残暑かな

千葉 神田 恵琳



白萩のはや刈られをりガラシヤの忌
一点の疵なき空の帰燕かな

夏月やよぎる鴉のすでに絶え

むかへ傘つかみ出る道夕立雲

夕ぐれのプールは明かし蚊喰鳥

夏瘦や植庖瘡のあと確と

緑陰や誓子多佳子の句碑並ぶ

音戸瀬戸扇をかざす清盛像

夕爾忌の近しと告ぐる蟬の声

句碑守る夫人健在さるすべり

夏枯をまめに通つてくれしかな

塩きかせ肉焼くかをり蟬の屋

黙禱の一分間や夏果つる

週あけの雨のあしたの木槿かな

千葉 吉村さよ子

広島 平 絵美子

東京 坂本依誌子

余言

安立公彦

ゆく窓外の、ほのかな梅雨寒の冷気が一句を包み、その思いはこの句を見る私たちにもよく通じる。

生身魂と詠まるる齡となりけり

寺村 年明

同時発表の句に、〈老骨の置き処なき溽暑かな〉の句がある。作者は八十九歳。掲出句の「齡」に制限はない。百十年前正岡子規は、〈生身魂七十と申し達者なり〉と詠んでいる。子規の頃の古稀に生身魂はまこと相応しかろう。

作者は「詠まるる齡」としながら、また「老骨」の言葉も使っている。「老骨」の語感は不屈の意志を伴う。それは作者の一字も崩さない楷書の文字からも感じられる。己が齡を淡々と諧う姿勢がみごとに詠まれている。

ゆふがほやくるぶしぬぐふ身のひねり 三宅 文子

作者の句はデッサンがしっかりしている。「くるぶし」は踝、足首の左右の突起を指す。外側の突起を外果、内側を内果と呼ぶ。何十年も使っている足首だが、この句に遇って初めて見直した踝だった。

この句、「身のひねり」と言う身体の捻りを、「くるぶしぬぐふ」という動作でみごと表現している。引用が飛躍し過ぎるが、どことなく菱川師宣の「見返り美人図」を思い出す句だ。「ゆふがほ」の背景も適切だ。

梅雨冷のうすうす明くる敦の忌

小張 昭一

今年の七月八日は安住敦先生の二十五回忌だった。関東地方の梅雨明けは例年より遅い七月十七日。敦忌の頃は雨がちの日々だった。遡って祐天寺で安住先生の葬儀が行われた日も雨だった。当然のこと、雨あつての梅雨である。

しかしこの季節の長雨を「梅雨」と名付けた先人の知慧は素晴らしい。梅雨だけではない。歳時記の時候、天文、生活、行事のどの言葉も、生活に密着した言わば珠玉の言葉である。そして私たちは俳句を実作しているが故に、これらの珠玉の言葉を当り前のように使っているのだ。季語の再読は、俳人等しく忘れてはならない学習である。

今年の敦忌の前後は梅雨寒の毎日だった。作者は未明の床上で安住先生のことをあれこれと思い巡らしている。それはまた自身のことを思い出すことでもあった。うすうすと明け

夕端居「こころ散らかしめて染し

太田 慶子

「こころ散らかし」が意表外の表現だ。しかし句を唱しているとき、その意表外さの中に、作者の思いが良く込められていることに気付く。

黄昏時、一日の仕事から解き放された寧らぎの中で、作者の胸中にはさまざまな思いが湧く。作者はその胸中の思いをコントロールすることなく、思いの為すままに端居を楽しんでいる。ふと「こころ散らかし」という言葉が浮かぶ。それはまさに思い做すままの今の姿なのだ。

秋風にやさしくされてあたりけり

橋本 リエ

同時発表の句に、ヘラベンダーの香を同伴の見舞客がある。作者は現在入院されているのか。

秋風にやさしくされているということは、わが身を秋風の直なかに委ねているということだ。風は空気の流れ、意志は無い。しかし臥す身にとつて、ひとすじの秋風は爽籟のような優しさでわが身をつつみ込む。そういう思いが素直に表現されている。

出版の訳本も添へ盆用意

平野加代子

「出版の訳本」は、今年七月悠書館から上梓された

二百五十頁に及ぶ、『スパイにされた日本人』。エドナ・エグチ・リード著、加藤恭子・平野加代子訳。サブタイトルに「時の壁をこえて紡ぎなおされた父と娘の絆」とあるように、国家によって断ち切られた家族の絆を取り戻すための、理解と和解への長い旅路の物語である。

著者のエドナは、この物語の主人公江口孝之と、零落した、しかし物静かな美貌の英国人女性の二女としてロンドンに生まれる。孝之は当時台湾銀行ロンドン支店に勤務。

物語はやがて孝之の謂れ無い不当な逮捕、今次大戦へと続く。この欄ではその梗概も写し得ない長い複雑なストーリーである。文中孝之の記した「獄中記」は歴史の貴重な資料とされる。共訳の加藤氏は作者の恩師に当たる人。共訳とあるが、翻訳の大方は作者によるものと推察される。

その訳本を亡き夫君の御霊に供え魂祭とした。一つの仕事を為し遂げた充足と夫君への思いが、巧まず出ている。

病窓に見る揚花花胸に落つ

北岸 邸子

花火には人それぞれの思い出がある。手暗がりに点す線香花火から大群衆と見る打揚花火まで、華やかな中にも郷愁を呼ぶ花火は、夏の夜空に記す心象の刻印である。作者はいま病窓遙かな揚花火を見ている。大空に開いては消えゆく花火は、いつしか作者の胸中に落ちる思いがするのだった。「胸に落つ」はみごとに把握である。